



第35期第1回京都市社会教育委員会議の模様を マナビィがレポート！

令和3年8月12日（木）京都市総合教育センターで、第35期京都市社会教育委員会議の1回目となる会議が開催されました。初回ということで、自己紹介や今後の会議の進め方についての議論がされました。会議の模様をマナビィがレポートします！

■ 出席委員（17名のうち15名） ※五十音順

石川 一郎 委員，稲垣 恭子 委員，植松 明彦 委員，岡田 智子 委員，
佐竹美都子 委員，園部 晋吾 委員，豊田まゆみ 委員，永田 紅 委員，
廣岡 和晃 委員，本郷 真紹 委員，柁木 良子 委員，森 清顕 委員，
森口 真希 委員，山田 俊夫 委員，山野真梨紗 委員

※下線の委員はオンラインによる出席

第35期第1回社会教育委員会議次第

- 第35期委員自己紹介 資料1
- 委員の職務・会議規則について 資料2・3
- 議長・副議長の選出

開 会

1 議 事

- (1) 会議の公開について 資料4
- (2) 京（みやこ）まナビミーティングについて 資料5
- (3) 第35期の審議テーマ等について 資料6

2 報 告

- (1) 京（みやこ）まナビミーティングについて（7月 Web 公開分） 資料7
- (2) 京（みやこ）まナビいニュースレターについて 資料8
- (3) 令和3年度 指定都市社会教育委員連絡協議会（大阪市）について 資料9

3 主催事業及び刊行物の案内

閉 会

■ 教育長挨拶

京都市教育長の稲田です。開催にあたり、一言御挨拶申し上げます。この度は第35期第1回社会教育委員会議にあたり、引き続きの委員の先生方、本当にありがとうございます。また、新しく6名の委員の方にご就任いただきました。専門分野の御見識、あるいは市民公募委員の市民としての視点から、PTA、校長会といった学校現場でのご経験から、様々な御意見を賜りたいと思っています。



昨年以來、新型コロナウイルスが学校教育、文化芸術、労働環境、食文化、宗教など、我々の生活スタイルに大きな影響を与えております。当然ながら、命・健康が第一ですが、ややもすると何もかも不要不急と言われ、悪者にされてしまうところがあります。ただ、不要不急と言われるものほど、人間らしく生活する上で、重要なものがたくさんあると思います。

小中学校におきましては、この3月に国の予算で、全ての子どもに一人一台のタブレットパソコンが配布され、授業で活用されています。去年は、京都市の全ての小中学校が修学旅行に行く等、感染症対策を徹底しながら、人と人との絆を大事にした体験活動を重視しています。

これを私は、ウィズ・コロナ時代に、ウィズ・ICTとウィズ・ヒューマンでやらなければならないと言っています。他の分野でも、リモートワーク、演劇・演奏会のオンライン配信等、ICTを活用した試みが進んでおります。またPTA活動でもICTを活用されています。

ウィズ・コロナ、ポスト・コロナの時代には、生涯学習もICTを活用しながら、市民の豊かな生活を実現していく必要があると思っています。こうしたことも含めて、社会の変化に適應した京都らしい生涯学習のあり方につきまして、御意見をいただきたいと思っていますので、どうぞよろしく願いいたします。

■ 門川 大作 市長のメッセージを披露

■ 第35期委員の自己紹介

○ 石川 一郎 委員（京都新聞社論説委員長）

京都新聞社で論説委員長をしております。前期に続いて委員を務めさせていただきます。2年間経験し、いろいろな方の話を聞くことができ、私自身も勉強になりました。私は新聞社に勤務し、専門分野がある訳ではありませんが、素人目線で自分が感じていることを発言させていただこうと思っています。



○ 稲垣 恭子 委員（京都大学理事・副学長）（オンライン参加）

私は前期から引き続き、社会教育委員をさせていただくことになりました。前期でもいろいろなテーマで勉強になることが多く、その中で、京都の社会教育の学びを広げて深めていく上で、京都は豊富な文化的な資源があるというアドバンテージが多いことを実感したところです。

私は3月に京都大学教育学研究科を退職し、現在は理事と副学長という立場で、国際・男女共同参画等の担当をしております。



○ 植松 明彦 委員（令和2年度京都市PTA連絡協議会会長）



令和2年度京都市PTA連絡協議会会長をしておりました。私は農業を営み、市内で野菜を作っています。畑に近隣の親子を招いて、野菜の収穫体験をする、小学校でゲストティーチャーとして、野菜について一緒に学ぶ、幼稚園で大根の種まきをする等、子ども達と一緒に学んでいければと活動しています。

○ 岡田 智子 委員（市民公募委員）

今期、初めて委員を務めます。立場は大学生で、他に手話通訳士として、聞こえない方と聞こえる方のコミュニケーションの橋渡しをしております。

地域の活動としては、放課後まなび教室のスタッフとして約7年活動しています。今年はコロナで開催できず、子ども達と接することができていませんが、学校に行けば元気をもらえるということを経験しております。



○ 佐竹 美都子 委員（株式会社西陣坐佐織代表取締役、アテネオリンピックセーリング競技日本代表）



前期から引き続き社会教育委員をさせていただくことになりました。私は京都の西陣で西陣織を織るメーカーをしています。2004年のアテネオリンピックにセーリング競技で参加させていただきました。東京オリンピックもコロナ禍での開催ということで賛否両論ある中、やはりアスリート達の努力・成果に感動しました。スポーツを通じて学ぶこともたくさんありますし、京都という土地柄、いろいろな切り口で学びがあるところですので、私なりの意見を言い、勉強させていただきたいと思っております。

○ 園部 晋吾 委員（NPO 法人日本料理アカデミー理事（地域食育委員会委員長）、山ばな平八茶屋主人）

日本料理を国内、そして海外へ広げていく活動をする NPO 法人日本料理アカデミーで、地域食育委員長を長くしております。その関係で京都市教育委員会学校指導課と、小学校で「だしを味わう授業」の取組みを約12年しております。メインの仕事は、山ばな平八茶屋という料理屋をしています。仕入れや料理を作る等、私の経験の中で参考になるようなお話ができればと思い参加をさせていただいております。



○ 豊田 まゆみ 委員（京都市地域女性連合会常任委員）



京都市地域女性連合会の常任委員をしております。女性会は、会員の高齢化や会員数の減少等の課題があります。各学区を単位とした地域女性会では、学習活動やごみ減量の立場から環境に対する取り組み等を継続して行っています。

この場ではいろいろな分野の方の貴重なお話を伺え、私は得した気分です。ここで聞いた話を女性会の活動に活かせるようにしていきたいと思っております。

○ 永田 紅 委員（歌人、京都大学特任助教）

歌人ということで、短歌（五七五七七）を作っていますので、文学や詩歌の言葉に興味があります。一方で社会の言葉にも関心があり、面白いと思うこともありますし、少し危機感を持つこともあり、そういうこともお話できたらと思います。

また、大学では細胞生物学の研究をしています。コロナ禍の状況で、サイエンスと一般社会がどんなふう近づけるのかということも考えていければと思っております。



○ 廣岡 和晃 委員（日本労働組合総連合会京都府連合会会長）



労働組合連合会で会長をしております。私自身はパナソニックの出身であり、ものづくりに取り組む業者にいろいろな教を乞うという立場からも、お話させていただきたいと思っております。これからの京都の未来の子ども達のために、皆さんと話をしながら、労働組合の立場でもお手伝いをしていきたいと思っております。

○ 本郷 真紹 委員（学校法人立命館理事補佐，立命館大学文学部教授）

前期は副議長をしておりました。私は立命館大学文学部で、奈良平安時代の日本史学の専攻を担当しております。

大学では、昨年の後期から、少人数の授業を中心に対面式の授業に戻していきました。授業をオンラインにすると、学生のご家庭から「大学に行かせる価値がない、何を考えているんだ」と批判が出ます。一方で学生を通わせると、近隣の市民の方から「コロナを蔓延させるつもりか」とクレームが来ます。どちらに転んでもどうもしようがありません。

この情勢下で、市民の方々と学生とが一緒になってできることを、考えあぐねているところです。いろいろな貴重な御意見を賜りたいと思います。



○ 柁木 良子 委員（同志社大学日本語・日本文化教育センター嘱託講師）



4年間が終わりまして、今回から3期目に入りました。毎回委員の先生方のお話を聞くのが、緊張と刺激になり、勉強させていただいています。

私は高校と大学で着物を通して、京都の文化や、着物文化の過去と現在と未来を考えながら、今後どのように着物・伝統文化をつなげていくかということ若い人達と一緒に考えています。

○ 森 清顕 委員（清水寺執事補，上智大学グリーンケア研究所非常勤講師）

普段は清水寺執事補ということでお寺の仕事をしております。お寺の仕事の中に、学生が世界遺産をテーマに学ぶ授業があり、様々な大学の学生がお寺にお越しになり、講義をしながら1年間一緒に学んでいます。コロナのため、対面とリモートとどちらにするのか大変苦慮しました。

生涯学習としての一般の方々の学びの場も、今、危機的な状況になり、複雑な問題を抱えています。リモートリアルか、何が良いのか、様々な分野の先生方のお話を伺いながら、考えていけたらと思っております。



○ 森口 真希 委員（株式会社堀場製作所ステンドグラスプロジェクト推進室室長）



新任で社会教育委員を務めさせていただくことになりました。堀場製作所は、京都に本社を置く分析・計測機器のメーカーで、「測る」ことを中心にグローバルに機器製造・サービスを展開しています。既に社員は、日本人が4割を切り、海外のメンバーと共に仕事をすることが多いです。

私自身は「ステンドグラスプロジェクト」という名前で、企業内でのダイバーシティ、多様性の推進を担当しております。当初、女性の働く

環境を整備するにあたり、女性のリーダーをどのように育てていくのかという問題意識から始まったプロジェクトですが、今は外国籍社員の活躍、シニア、障害者の方、様々な方が、どのようにすれば、それぞれの個性を活かし色とりどりに輝けるのかを、経営トップと現場と人事と一緒に考え、推進する立場です。

プライベートでは子どもが2人います。やはり、企業で働き続ける女性が増える中で、子育てや介護との両立が必要になります。コロナ禍でオンラインが加速した背景としては、働き方を変えていく、家庭と仕事を両立していくことも、前提にあったと思っております。

個人的な活動としては、女性を応援したいということで、メンタリング、自分の会社以外の先輩に教えてもらう、アドバイスしてくれる人を紹介するNPO法人も立ち上げています。

委員をさせていただくにあたり、社会の中で、企業人として学んだことをどのように還元するか、人生100年時代と言われる中で、キャリアと学びをどのように循環させていくかということをご共々と考えて発信していければと思います。

メンタリングとは？

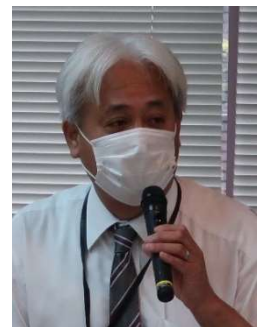
指導・相談役を担う社員が後進をサポートする制度のこと。指示や命令によらず、メンターと呼ばれる指導者が、対話による気づきと助言により、本人と関係を築き、自発的・自覚的な発達を促す方法



○ 山田 俊夫（京都市小学校長会幹事・京都市立小栗栖小学校長）

本校は、今年度末をもって閉校となり、来年度は石田小学校と一次統合し、令和7年度4月には醍醐地域初の小中一貫教育校が開校します。新しい学校を作っていく貴重な時にこの会議に参加させていただくことになりました。

新学校に向けて計画等考える際の参考にさせていただければと思っています。



○ 山野 真梨紗 委員（市民公募委員）



同志社大学社会学部教育文化学科4年の山野真梨紗と申します。大学では、シュタイナー教育やホリスティック教育について勉強しています。大学生がいかにして生涯学習の体系に参画していくのかということに関心があり、皆様のお力添えをいただきながら、勉強し、考え

ていきたいと思っております。

シュタイナー教育とは？

オーストリアやドイツで活動した哲学者・教育学者レドルフ・シュタイナーが提唱・実践した教育。シュタイナーが1919年にシュトゥットガルトに開いた自由学校が始まる。1920年代の自由主義教育の流れを受けた、子供の自主性を尊重した教育。

ホリスティック教育とは？

知育、徳育、体育などを別々にせず、また、人間と自然界とのつながりを全体として重視することを理念とする教育の新しい考え方。近代の知育に偏重しかつた教育に対する反対意見として提唱され、感情、意志、身体性を重視し、バランスの回復を図ろうとするもの。

今回御欠席の

片山 九郎右衛門 委員（観世流能楽師）

鈴鹿 可奈子 委員（株式会社聖護院ハッ橋総本店専務取締役）

には、次回以降の御出席時に自己紹介をしていただく予定です。



■ 委員の職務・会議規則等について

委員の職務・定数・任期及び会議規則等について事務局から説明がありました。

■ 議長・副議長の選出

議長に 本郷 真紹 委員，副議長に 森 清頭 委員を，との推薦があり，全会一致で決定しました。

○ 本郷 真紹 議長（学校法人立命館理事補佐，立命館大学文学部教授）
改めてよろしくお願いいたします。昨期，副議長を務めさせていただきましたので，それに引き続き，吉川議長の後任として務めさせていただけたらと思います。

○ 森 清頭 副議長（清水寺執事補，上智大学グリーンケア研究所非常勤講師）
本当に若輩で，諸先生方がおられるところで大変ドキドキしておりますけれども，どうぞよろしくお願いいたします。

■ 開会

■ 議事一 会議の公開について

会議は原則として公開し，市民の傍聴を認めること，また，会議の摘録を公開することについて，合意しました。

■ 議事二 京（みやこ）まなびミーティングについて

市民の皆様に生涯学習の機会を提供するとともに，生涯学習のまちづくりを進める機運を高める一環として，社会教育委員による講演，研修，授業等を行う「京（みやこ）まなびミーティング」を市内各所で実施しています。今期も引き続き実施していくことで合意しました。

これまでに実施したミーティングのレポートはこちらから↓

<https://www.city.kyoto.lg.jp/kyoiku/category/180-8-2-0-0-0-0-0-0-0.html>



■ 議事三 第35期の審議テーマ等について

○ 事務局（吉川 生涯学習推進課長）

35期のテーマについて，「はばたけ未来へ！京プラン」は継承しています。「京プラン」は，京都市全体の様々な政策を進める上での基本計画で，社会教育・生涯学習はその一部となっています。今年度から「京プラン」が新しくなり，今後5年間の「京プラン2025」となっています。

生涯学習のまちづくりは進んできておりますが，課題として，人と人とのつながり・地域コミュニティの活性化等に資する生涯学習を推進していく必要があること，市民が孤立することなく生きがいをもって暮らせるように，生涯を通して学び，地域に参画する環境を構

築すること、家庭や地域の教育力低下が懸念される中で、関係機関が連携し、親の学びや育ちを応援する取り組みを充実させる必要があること、などがあります。

これらの課題を踏まえ、「みんなでめざす 2025 年の姿」として、「1. 市民がまちのあらゆる場で学んでいること。2. 人生 100 年時代に向けて学びと活動の循環が形成され市民がより豊かに生きていること。3. 京都ならではの学びを通じて多世代が交流・共生するまちになっていること。4. 「子どもとともに育む京都市民憲章」の理念に基づく行動が市民に浸透している。」という姿に向け、取り組んでいくこととなります。



この「京プラン 2025」を踏まえ、案として「多世代が交流・共生する生涯学習のまちづくり」としました。現在はコロナ禍で、人と人とが直接交流することが難しくなっていますが、そのような時だからこそ、「交流・共生」というのは大切な視点かと思っております。2年間を通したテーマの案について、御意見いただければと思います。

○ 本郷 真紹 議長（学校法人立命館理事補佐，立命館大学文学部教授）

テーマ案の多世代と交流・共生，SDGs とダイバーシティというのは，多様な意味を含んだ言葉だと思えます。その中でとりわけ，京都の特色や現状をふまえた上で，どこから重点的に取り組んでいくのかというのは大きな意味を持っています。テーマ設定をするにあたり，委員の皆様から忌憚のない御意見，行政等に対する要望を出していただき，論点を絞り込む中で，テーマを設定して，議論を進めることができればと思っております。つきましては，日常お感じになっていること，どのようなことでも結構ですので，お話しいただければありがたいです。

○ 森 清顕 副議長（清水寺執事補，上智大学グリーンケア研究所非常勤講師）

京都というまちの特性が，京都の社会教育では大事になってくると思えます。多世代ということで，特にコロナにおいて分断されている現状があります。リアルに会って，しゃべり，ふれあうことが大事ですが，特に教育の分野において，これはとても大事なことです。

一方で学びの中において，デジタルが急速に発展し，利点もあると思えます。ですから，それぞれの事業において，リアルの場合とリモートの場合と多方面の検討が，今後の全ての課題にもかかってくるのではないかと考えています。特に文化庁の移転等，京都という特色を活かした京都らしい生涯学習についての議論ができたらと思っております。

○ 園部 晋吾 委員（NPO 法人日本料理アカデミー理事（地域食育委員会委員長），山ばな平八茶屋主人）

「多世代が交流・共生する生涯学習のまちづくり」というのは，良いテーマですが，難しいテーマだと肌で感じています。

我々の業界の中でも、父親と我々の世代とで世代間ギャップが大きく開いてきている中で、どうすれば多世代が交流・共生をうまくしていけるかということは課題の一つになってきています。こういうことを、少しばらして考えていくことが各回のテーマになってくるかと思うのですが、最終的には多世代の交流・共生がどのような形で上手く実現できるか、というところまで話が持っていければいいと思っております。このテーマにつきましては、異論はございません。

○ 植松 明彦 委員（令和2年度京都市PTA連絡協議会会長）

一市民として、この『はばたけ京プラン』を知りませんでした。私は南区民で、南区においても基本計画を策定する時期にあり、その委員となり、議論を進めています。そこで「いかに立派なことをこの場で議論しても、市民の皆さんに知ってもらわないと全く意味がない」という意見がありました。ですので、中・高校生に事前にアンケートをとり、若い人を巻き込み、「南区をどうしていったら良いか」を議論し、計画を作るという取り組みをしています。

このテーマについては私も異論はありませんが、議論の場やプロセスも含めて知ってもらうことも大事だと思いました。そうすれば、良いものになっていくでしょうし、若い人も当事者意識が芽生えるのではないかと思います。プランを見て、私も勉強しながら、考えていきたいと思えます。

○ 本郷 真紹 議長（学校法人立命館理事補佐，立命館大学文学部教授）

画期的な取り組みが実施されていますが、周知を図ることは難しいです。様々なツールが発達して紙媒体でなくても情報が伝達されますが、実際にはそれを取り扱える世代というのは限られています。特に高齢の方はインターネットを使いこなすのが難しい方もいらっしゃるので、今後どういう形で広報していくのか、市民の方に浸透させるかは大きな課題になってくると思います。

○ 石川 一郎 委員（京都新聞社論説委員長）

テーマに関して言えば、多世代の交流、世代間ギャップというお話もありましたが、これから少子高齢化、人口減少という時代をにらむと、異なる世代が交流して、どういう風にお互いの意思疎通を図って新しいものを生み出していくかという視点は大事だと思いますので、テーマとして多世代が交流・共生する生涯学習のまちづくりということに異論はありません。

少し気になったことがあり、テーマの上に「はばたけ未来へ！京プラン 2025」とあります。それから各回の審議内容の案に、「市政の抱える課題に対して社会教育ができること」とありますが、社会教育委員の根拠、社会教育法第十七条に、「社会教育委員として教育委員会に助言するための職務」とあります。例えば、市政が抱える課題をこの会で議論する、それから京都市の当局で掲げられている「京プラン」の推進という文言を使って大きいテ

マを設定するのは、少しこの会の趣旨とは外れるのかなと率直に思っております。

○ 本郷 真紹 議長（学校法人立命館理事補佐，立命館大学文学部教授）

どういう形ですみわけを図ると建設的な議論ができるようになるか、考えていかなければならないことだと思います。改めて具体的なテーマを設定する中で委員の皆様方から御意見を頂戴していきたいと思っています。



○ 山田 俊夫（京都市小学校長会幹事・京都市立小栗栖小学校長）

私もこのテーマで良いと思っています。

本校の統合の話ですが、少子高齢化が、醍醐地域は特に進んでおり、以前は2,000人いた児童数が85名まで減ってきています。魅力ある学校を作り、若い世代が流入して、子どもの数が増えて活気のあるまちづくりをしていきたいと思っています。

しかし、今はコロナもあり、例えば公園で子ども達が遊ぶと、近隣の方から「マスクもせんと遊んでいる」等と苦情が学校に寄せられます。最近の公園の整備では、ボール遊びは以前からできませんが、子どもが遊ばなくなり、草が生えると、遊具が撤去され、健康作りのための設備が作られていき、ますます子ども達の足が遠のくということもあります。

世代が交流するためには、直接、いろいろな方とふれあう機会が必要ですが、緊急事態宣言等が出てきますと、学校に人を呼べなくなり、地域の方との交流や、外部講師による授業を行いにくなっています。今のご時世、多世代の交流は学校現場では非常に難しいです。どうすれば、子ども達が人とふれあう良さを感じながら、学んでいけるのかと考えているところです。

○ 本郷 真紹 議長（学校法人立命館理事補佐，立命館大学文学部教授）

議論の進め方にも関係しますが、ウィズ・コロナとポスト・コロナをどういう風に切り分けるかという難しい問題だと思います。2025年の体制を考えると、過剰にコロナという状態を意識せずに、「こうあるべき」という一つの理想論を説いたらいいと思うのですが、残念ながら、現在は、制約を受けてほとんどできません。

「今、どうすべきか」ということと、「将来的にコロナの状況が克服されれば、どのような形で多世代交流を実現していくのが望ましいか」。この2つの観点・視点から御指摘いただく必要があると思います。

今日は、具体的にテーマを絞り込んで、設定する訳ではありませんので、ひとまず課題として受け止めて、今後のテーマ設定等に活かしていただければと思っております。

○ 豊田 まゆみ 委員（京都市地域女性連合会常任委員）

私たち女性会は、子ども達とふれあいながら、風呂敷の良さを教える、廃油を使った石鹸づくりをする等の活動をしています。今の状況ですと、学校は子どもと地域の人とのふれあいをできるだけ避けたいと、シャットアウトされているところが多いです。

少し視点が変わりますが、私は西京区に住んでいるのですが、夏祭りやイベントが全部中止になりました。その時に、自治体の方とお話した中で、「近くの京都大学や京都経済短期大学の学生と一緒に、今年度は無理でも、来年度に向けて何か話し合いができないか。」という意見が初めて出てきました。「時間がかかり、難しい。」という意見も出ましたが、まちづくりの点で、多世代との交流となるような気がします。

女性会としても、バザーをする等、地域の取り組みの中で若い人たちと何かしたいと思っています。しかし、コロナが落ち着いた次の段階の話になります。夏祭りも、来年度に向けて、展望を持ってやっていきたいと思っています。

○ 本郷 真紹 議長（学校法人立命館理事補佐、立命館大学文学部教授）

高齢の方々と若い世代、子ども達、この世代間ギャップは大きいですが、そこをどういう形で一つにつないで、双方に良い影響を与えるようなものにしていくかということは、重要な観点です。

京都の場合は地域的な特性として学生が多いので、中間に位置する学生の力をどのような形で、多世代間交流に寄与させていくのかというのは、常に意識しています。

○ 柁木 良子 委員（同志社大学日本語・日本文化教育センター嘱託講師）

今、コロナ禍で、約8割がオンライン授業となり、学校に来て友達が作れず、横のつながりもなく、学生社会が孤立している感じがします。そもそもコロナ以前も、地域・町内でも、ご近所のつながりが、昔と比べると薄れてきていたような気がします。今後これが終息したからといって、すぐに前の状態に戻るわけではありません。コロナ前も、会社は会社、学校は学校、地域は地域、世代でも環境でも、それぞれが分離していたような気がします。

今後の課題としては、分離しているものをどのようにしてつなげていくか、また、社会教育委員会議で話し合ったことを、どのように発信できるのか、一緒に考えながら進めていければと思います。

○ 本郷 真紹 議長（学校法人立命館理事補佐、立命館大学文学部教授）

学生と市民のふれあいについて、コロナの制約がなかった時は、積極的にまちの活動に学生が参画することがありました。例えば、市民一斉清掃に学生がクラブやクラス等の集団で参加する、また、祭りで重要な役割を担うことがありました。そういう場が大事ですが、今は全くできません。

今期、議論を進める時に、コロナの状況の中でどうするかというのと、克服された暁に、どのように理想的なふれあいを行うのか、全く感じが違ってくると思います。そのあたりを

整理する必要があると思います。

○ 山野 真梨紗 委員（市民公募委員）

一学生の意見としては、確かに参加する場をいただける機会が少なくなっている印象をもっています。学生の中でも特に、1・2年生は、オンラインの授業が多いので、友達や仲間を作れないということで、孤立をし、鬱になってしまう子も多いと聞いております。学生としては何か機会をいただけたら、積極的に参加する人もいると思うのですが、それに対して市民の方が、コロナの感染拡大を懸念される現状があると思います。

○ 廣岡 和晃 委員（日本労働組合総連合会京都府連合会会長）

これまでできていたことや、本来、こうした方がいいと思うことが、全てコロナで制約されています。コロナ対策をしっかりとしながらも、多世代が交流・共生する生涯学習プランの整備ですが、私たちが一番、今課題だと思っているのは、社会全体で子どもを育てることだと思っています。そういった中で学生さんに、ぜひ参加していただきたいこともあります。

社会全体では人口減少、少子高齢化が進んでいます。私達、企業人が、定年ではなくて、30、40、50歳と、働き盛りの社会人も、社会貢献を含めて、仕事をしながら、空いた時間、空けた時間、時間を分けて、地域の子供達とふれあうことが大事だと思っています。他府県や違う区からではなく、その地域の学校や大学を起点として、地域の企業者の方が、地域の特性を生かして交流しながら、いろいろな形の生涯学習をしていけばよいのではないのでしょうか。京都には様々な文化、芸術があります。

人口減少で学校統合は必要だと思いますが、私の個人的な意見としては、統廃合はせずに、学校を活かし、そこにおじいちゃん、おばあちゃんを呼び、学校で多世代が交流できないかと思っております。

いずれにしても、私自身は、地域貢献を含めて会社が存在すると信じて、その中で私達、社会人が働きながら支援できることを考えていきたいと思っています。

コロナのため、本来は face to face がよいのですが、できなかったとしても、伝える方法はタブレット等他にもあると思いますので、相談しながら、提案していきたいと思っています。

○ 森口 真希 委員（株式会社堀場製作所ステンドグラスプロジェクト推進室室長）

去年の後半頃から、会社でも、face to face のコミュニケーションがいつ戻るのかという議論がありました。今年に入っても、第4波、第5波が来て、アフター・コロナを考えることも大事ですが、今できることをやっていこうという動きがあり、オンラインでも、しっかりと対話の場を作っています。社会のダイバーシティ活動や、教育研修の中で、オンラインであっても、空気感も含めて共有していくコミュニケーションの場を作ることに取り組んでいるところです。

この状況が2、3年と続くと取り返しがつかないような混乱が起こるのではないかと懸念しています。特に経済活動では、致命的なことになりますので、意識的にコミュニケーシ

ョンをとっていく必要があります。

コロナ禍で、多世代についてですが、会社でもジェネレーションの価値観のギャップは課題にあがっています。そのひとつの取り組みとして、「リバースメンター」という制度を取り入れ、若手の意見を年長者が聞いていくという取り組みをしています。外資系企業では以前から事例がありましたが、最近、台湾のIT担当大臣のオードリー・タンさんが出てこられて、リバースメンターが有名になりました。年長者や経験者が正解をもっているのではなく、若手のフレッシュな観点、柔軟性も生かしていこう、Z世代から学ぼうという取り組みもしております。お互いに学び合うということができれば、オンラインの場にいろいろな方がでてきてもらうことができるのではないかと考えています。

審議テーマの中で、SDGsとワーク・ライフ・バランス、健康長寿、そして学びの成果の還元というのは、全て「キャリア教育」というテーマでまとめると、一貫性があるのではないかと考えています。キャリアというのは企業人のワーク・キャリアだけではなく、人生そのものです。社会活動しながら、どうやって自分自身が生きていくのか、社会に還元していくのかということにつながると思いましたので、審議内容をグルーピングができると思います。1回の会議で、全ては議論できなくても、つながりがあるものがみえると感じております。

Z世代とは？

日本では1990年後半頃から2012年頃に生まれた世代を指す。デジタルネイティブ、SNSネイティブ、さらにスマホネイティブでもあるといった特徴を持っている。



○ 佐竹 美都子 委員（株式会社西陣坐佐織代表取締役、アテネオリンピックセーリング競技日本代表）

「地域」というところが、生涯教育には影響が大きいと思います。スポーツは、各団体が皆さん前向きに活動され、自発的な形で年齢を超えたつながりができていると思います。

私は、コロナについて、将来の形が早く来ているだけのような気がしています。今できることで形ができれば、アフター・コロナでは必ず成功し、広まると思います。

何かをしてもらった経験がある人は、必ず後輩に何か教えるなど、受けた側は必ず与える方に動くのではないかと気がします。それがどうやって増えるのかと考えた時に、オリンピックは、人が集まらなくても、面が広がったので、影響力が大きかったと改めて思いました。

目的や機会を増やすと、人が集まって広がるとは思います。一点に何か目的や機会を設定することができない場合は、オリンピックのように面に対応するしか、今の段階ではないのかと思います。そういった意味での面は、この社会教育委員の硬い感じや学校教育等ではなく、スポーツの団体や、また違う団体と絡めた協力体制もあるのではないかと考えています。

○ 岡田 智子 委員（市民公募委員）

私の経験談になりますが、手話に関しては交流する場を通じて学んでおり、年齢制限はなく、子どもから80歳代の方までいます。「職場で耳が聞こえない人がいたのに、その人のことを理解することができなかった」という思いを持ち続けてきて、定年後に手話を勉強してみたい等、様々な気持ちで手話に関心をもった人が集まっています。

言語を学ぶ時、まず「私の名前は～」から始まって、家族や趣味など自分のことを話しながら勉強していきます。そうすることで、気持ちの交流が生まれます。過去には戦争体験を聞くこともあり、お話を聞く機会に恵まれていると感じます。そう思いますと、集まる場所は大事なと思います。

私は大学生でもありますが、大学の学び方もコロナで変わりました。私が入学した時は、いきなり教科書がダンボール箱で送られてきて、「さあどうしましょ？」と思いながら始まりました。通信制ですので、一人で学ばないといけません。しかし、大学は学生が集まる場所を提供してくれました。そこで先輩に出会い、学習の情報交換をすることができました。今は、コロナで、集まることができませんが、オンラインで定期的に集まっています。自分の気持ちを聞いてもらえる貴重な場所です。学生としては情報が欲しいと思っておりますので、そういう機会があったらいいと思っています。

○ 本郷 真紹 議長（学校法人立命館理事補佐、立命館大学文学部教授）

オリンピックについては、いろいろな意見が交わされており。その中で、海外メディアから、ボランティアは献身的にいろいろなことに取り組んでいると評価されていました。東日本災害の時も、ボランティアに参加した学生は、交渉する相手の方との関係だけでなく、同じボランティアとして集まっている者同士で、刺激をしあって成長しました。制約された中でも、志を持った者同士が、同世代の学生同士ではなく、場合によっては世代を超えてふれあえる場を、どういう形で設定できるかを考えていければと思っております。

○ 永田 紅 委員（歌人、京都大学特任助教）

「場」の問題や、生涯学習、SDGs の観点とつながりますが、サイエンスと一般社会との関わりについて。100年前のスペイン風邪のパンデミックの時には、ウイルスが原因かどうかまだわからない状態でした。政府が出しているポスターにも、「恐るべし『ハヤリカゼ』の『バイキン』」と、ウイルスがばい菌扱いされていました。100年経ち、今は科学が進歩しましたが、まだサイエンスに対する一般社会の拒否感はあると思います。

そもそも、「ウイルスとはどのようなものか」、「細菌とウイルスとの違い」を改めて知る場は、意外と少ないと思います。

ウイルスの構造についてですが、コロナウイルスの場合、ウイルスが細胞から出ていく時に人間の細胞の膜をかぶって出ていきます。これをエンベロープと言いますが、その膜は、アルコールや界面活性剤、石鹸等で壊されます。そこで、石鹸で手を洗う意味をきちんと理解していると、ひと手間あっても石鹸で手を洗おうと納得しながらできると思うのです。そういうことをどこかで基本的な知識として得られる場があるといいと思います。

科学的な知識も大事ですが、さらに大事なのは、科学的な考え方をどうやって習得するかということです。いろいろな二



(地方独立行政法人大阪健康安全基盤研究所 HP から)

ユースに対して、自分なりに疑問をもてるか、本当かどうかと批判的に考えられるか。学ぶ場としては、市民講座や市民新聞などさまざまなものがあると思います。

SDGsの問題としては、森林伐採、地球温暖化がこのまま放置されると、これまで人類が出会ったこともない未知のウイルスが出てくることなども懸念されます。市民講座は文化的なテーマの講座が多いですが、このようなコロナ禍の時だからこそ、サイエンスも文化のひとつとして、少しずつ理解し、関心を持ってもらい、科学的なものの考え方を身につけ、フェイクニュースを自分なりに一回立ち止まって考えてみる習慣をつける場があればいいと思います。自分を守ることが、地球を守ることにつながります。

○ 稲垣 恭子 委員（京都大学理事・副学長）

私も教育を専門にしていますが、今回のコロナの経験を共通にすることで、「交流する」とはどういうことか、交流することによって何が得られるのか、改めて共通認識するようになったと思っています。



「世代間の交流」というテーマは根幹的な問題だと思います。「交流」には、明確な目的を持つ集まりと、なんとなく集まってくる無目的な集まりがあるように

思います。社会教育の集まりの場は、明確な目的はないけれど、結果的に何かを学べる、緩やかな交流も魅力であると思っています。

世代間の交流といいますが、先の見通しが立たない状況の中で、若い世代にとっては、どのようにしてこれから生きていったらいいのか、モデルがない時代になっていて、モデルが欲しいと思ってる人が、結構いると思います。いろいろな世代や分野の違う人達との出会いの中で、自分のモデルになるような生き方等を見つけられる場があったらいいなと思います。

また、交流する場合に、ギャップの部分にはふれないで交流する社交的な場もあると思いますが、世代間のギャップは、かなりあると思います。私が今取り組んでいる、ジェンダーに対する世代間ギャップはかなり大きく、各世代でそれが課題になっているという気もしており、家族、教育、働き方、いずれにもその問題が関わっていて、各世代によって、温度差があると実感しています。

そのような点をテーマにして、世代の違いを忌憚なく出したり、理解したりする場があったらいいと感じます。若い世代の進学に対する考え方や、若い世代と我々のような世代とでは問題と思ってる点もずれていたりします。そのようなことを突破口にし、考える場や、ある程度共通のテーマでありながら、あまり明確にしない、いくつかのテーマがあるといいと思いました。

○ 本郷 真紹 議長（学校法人立命館理事補佐、立命館大学文学部教授）

世代間の意識のズレ、ギャップについては、考えないといけない問題です。それをひとつ

の方向に向ける、埋め合わせるわけではなくて、それをそのものとして、そこから関連する事柄について、お互いに意識を共有し合うということに意味があるのではないかと思います。

■ 報告一 京（みやこ）まなびミーティングについて（7月 Web 公開分）

○ 事務局から

京都市社会教育委員が、学校や地域に出向き特別授業などを行う京まなびミーティング。第30回は、森副議長に清水寺を案内いただき、動画を撮影させていただきました。

第31回は9月10日に本郷議長に、第33回は9月24日に森副議長に、アスニー特別講演会として行う予定。第32回は、京都市醍醐中央図書館の醍醐味講座にて、9月11日に石川委員にご講演をいただく予定。

○ 森 清頭 副議長（清水寺執事補、上智大学グリーンケア研究所非常勤講師）

実際に清水寺に来ていただくのが良いのですが、動画配信はその時間に会場へ行かなくても、見ることができるという利点もございます。最後の方にコロナウイルスの社会に対してのお話も少しさせていただきました。



■ 報告二 京（みやこ）まなびいニュースレターについて

○ 事務局から

市民の皆様の学びのきっかけとして、京都市の生涯学習情報をお届けする、京まなびいニュースレター（アスニー発行の「まなびすと」に掲載）。今回は社会教育委員の活動について、市民の皆様に知っていただくために、ご提言を紹介している。

■ 報告三 令和3年度 指定都市社会教育委員連絡協議会（大阪市）について

○ 事務局から

毎年度、指定都市社会教育委員連絡協議会があり、7月に大阪市で開催予定だったが、コロナで書面開催となった。

協議題は各指定都市から提案され、コロナの関係で YouTube などオンライン講座を実施されているところが多い。YouTube では、全国の動画で学ぶことができ、学びの機会、対象が広がっていくと思う。

しかし、ご年配の方で情報機器を使える方と使えない方との格差、デジタル・デバイドが問題になっている。京都市としては、情報機器に不慣れな方の生涯学習の機会の提供の在り方について、各指定都市に回答を求めた。

京都市では、チラシにQRコードの使い方を紹介するなど、わかりやすく工夫をしている。

引き続き、デジタルでも配信しつつ、ご利用いただけない方への配慮をして取り組んでいきたいと思う。

■ 主催事業 及び 刊行物等の案内・説明

■ 閉会

■ 閉会挨拶（的山生涯学習部長）

